

# 日本美術史講義 7 b

2021年秋学期 火曜4限

担当：伊藤 大輔

第12回

# 【注意】

このパワーポイントスライドは、本講義の**受講者専用**です。

許可無く、複製・公開すること、あるいは知り合いや友人へ転送することは**禁じます**。個人の学習のみに使用して下さい。

違反しますと、**作品の所有者、写真の撮影者、写真の出版元等の権利者**とトラブルになる可能性があります。

トラブルを避け、自分の身を守るという観点から、制限にご協力下さい。

はじめに

今回は、正倉院の絵画のうち、「鳥毛立女図屏風」について学んでゆきます。

# ①鳥毛立女図屏風

## (1) 「鳥毛立女図屏風」

北倉

縦116.5~134.5cm

横 52.2~55.0cm

「国家珍宝帳」に「御屏風壹百  
畳」とある中に、「鳥毛立女屏  
風六扇」との記載があり、聖武  
天皇遺愛の品の一つとみられる。



正倉院宝物 北倉Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ (毎日新聞社) 正倉院事務所 (宮内庁)、1994, 1995, 1996

# ①鳥毛立女図屏風



第6扇

第5扇

第4扇

第3扇

第2扇

第1扇

坐る姿

立ち姿

当初の配置は不明だが、現在は第1~6扇と名づけられている。  
第1~3扇が立ち姿、第4~6扇が岩に坐る姿をとる。

(註) 屏風の一つの面を数える単位は「扇(せん)」と言います。

# ①鳥毛立女図屏風

## (2) 技法

1. 紙全体に白土を塗って下地とし、墨線で下図を描く。
2. 顔や手の肉身部分と衣の袖口に彩色する。
3. 頭髪・着衣・樹木・石等に鳥毛を貼付する。刃物で切って形を整える。

(現在は剥落)



第1扇  
顔や袖口等に彩色

# ①鳥毛立女図屏風

## (3) 図像的特徴

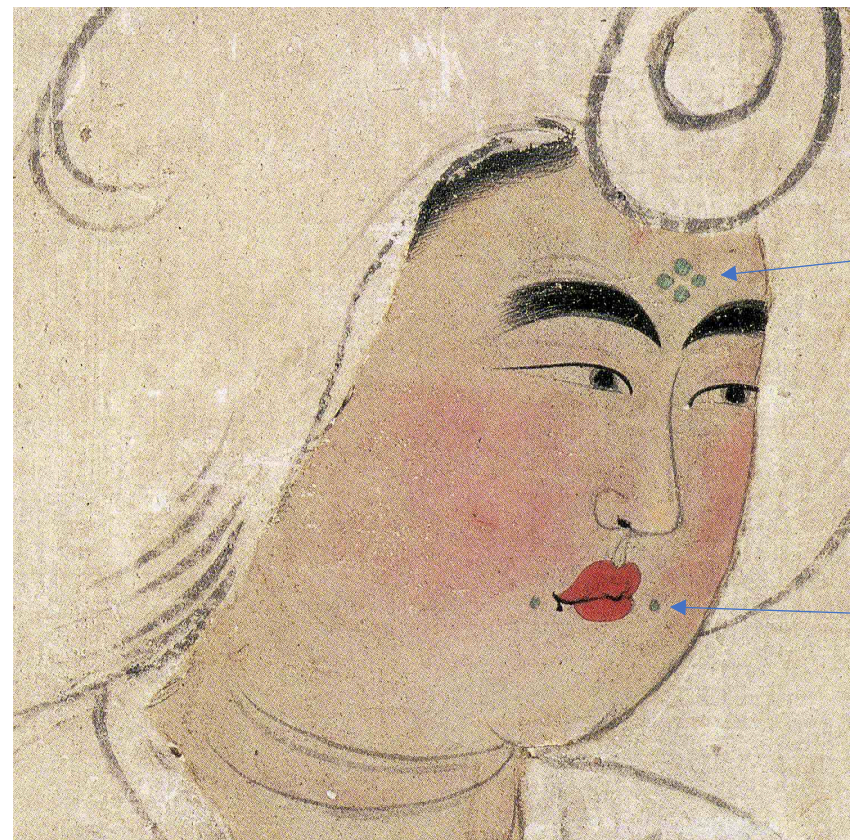
1. 豊満な肉体を描く
2. ゆったりとした衣装
3. 頬に朱の隈取り・小さくて厚い唇・太い眉・大きく弧を描く上瞼
4. 眉間に四点の花鈿（かでん）・口の両側に粧靨（しょうよう：化粧で作ったえくぼ）を置く
5. 結髪や描眉の形

以上5点において、**盛唐期の貴婦人の姿**を図像的模範としている。

# ①鳥毛立女図屏風



第4扇 豊満な体型  
ゆったりとした衣服  
独特の結髪



- 花鈿
- 太い描眉
- 朱の隈取
- 小さく厚い唇
- 粧靨



# ①鳥毛立女図屏風

## (4) 制作年代

第5扇の下貼りに天平勝宝四年  
(752) 6月の日付の文書があ  
ることから、この時点から献納  
された天平勝宝八歳(756)の  
間の制作の可能性が考えられる。



第5扇・部分

# ①鳥毛立女図屏風

## (5) 鳥毛貼成について

唐代の中国では、鳥毛を用いた衣服が女性の間で流行した。

※ 『旧唐書』五行志には、唐の安楽公主が百鳥の羽毛で織らせた「百鳥毛裙」(ひゃくちょうもうくん)を着用し、皆がそれを真似たため、美しい羽毛を持つ鳥がほとんど取り尽くされたとの記述がある。

# ①鳥毛立女図屏風

第2扇には、「百鳥毛裙」をモデルにしたらしい衣装が描かれている。

こうした唐の服飾の流行を反映して、鳥毛で衣装等を表現することが行われたと、一つには考えられる。



第2扇・部分

# ①鳥毛立女図屏風

また、当時の屏風の装飾技法として鳥毛の使用が広く用いられていたという事情も背景にある。

【例】

「鳥毛篆書屏風」 （北倉）

「鳥毛篆書屏風」 （部分）



# ①鳥毛立女図屏風



文字を墨線の輪郭でくくった内側に、鳥の毛を埋め込んでいる。



# ①鳥毛立女図屏風

唐の女性の服飾と、屏風の装飾技法の両方の文脈が合流して、女性像の表現に鳥毛を用いるという発想が成されたと考えられる。

※但し、「鳥毛篆書屏風」のように、濃淡の毛を交互に置いた単純な鳥毛の使い方であったかどうかは判断の材料が無い。

もっと多色の鳥毛を巧みに組み合わせて「吉祥天像」のような自然な衣装に仕上げていた可能性も考えられる。

(註) 「吉祥天像」は筆と絵具による絵画で、鳥毛は用いられていません。

「吉祥天像」 (薬師寺)



# ①鳥毛立女図屏風

日本画家・上村淳之による復原  
(NHK『日曜美術館』1988年での  
試み)

調査から判明した日本産ヤマドリの  
毛を直接画面に貼ると右図のような  
重厚な雰囲気になる。

本来の姿が「吉祥天像」のようで  
あったか、上村淳之の復原のようで  
あったかを判断する決め手は無い。



図版削除

# ①鳥毛立女図屏風

## (6) 各扇ごとの表現

「鳥毛立女図屏風」は、各扇ごとに画風が異なり、一扇ずつ別の画家が担当したと考えられる。

【次のスライドから、各扇の表現の特徴を個別にみてゆきます。】





# ①鳥毛立女図屏風

## 〔1〕第5扇

6人の中では最も指導的な画家と看做される。

- ・ 安定感、バランスのある描写
- ・ 彩色に頼らず、線描のみで立体感が把握されている。
- ・ 鼻梁線を中心に顔の各パーツがバランス良く有機的連関をもって配置されている。

など、**唐の正統的な画風**を示す。帰化人絵師、もしくは唐に留学した日本人絵師と想定。



# ①鳥毛立女図屏風



第5扇

上瞼、鼻梁、頬、頤などに微妙な肥瘦を持った線描を用い、立体感を表現。

顔のパーツの配置が整い、視線の方向がしっかり定まっている。

# ①鳥毛立女図屏風

## 〔2〕第3扇

第5扇の画家の画風を踏襲するが、描線が生硬で柔軟さに欠ける。

- この画家独特の表現として、濃墨の瞳の中央に白くキャッチライトを入れる（中心を削って白い下地を露出したもの）。
- 瞳の周囲に淡墨を入れないのも独特の表現。



# ①鳥毛立女図屏風



第3扇

瞳の中心を削ってキャッチ  
ライトを入れる。

上瞼の線や鼻梁線には、第  
5扇ほどのメリハリと伸び  
やかさが見られない。

# ①鳥毛立女図屏風

## 〔3〕第6扇

第5扇の系列の画家。特に肌の彩色法が近似すると言われる。

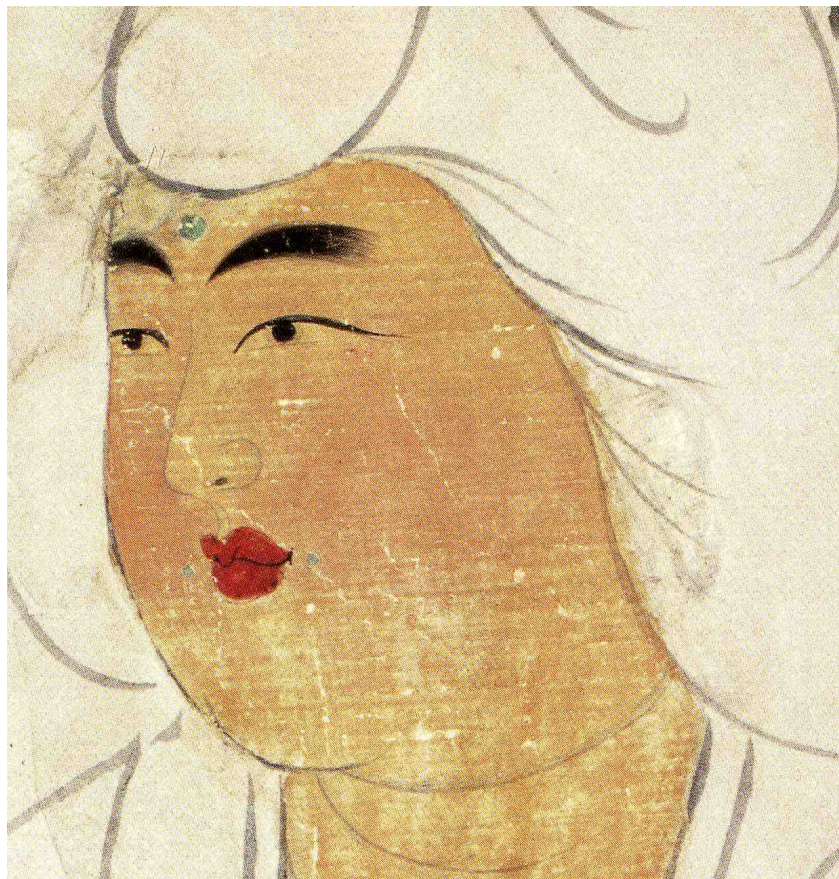
- ・但し面貌部のみが当初の部分で、周囲は後補。
- ・若々しい面貌を的確に描き出す表現力を持つ。



# ①鳥毛立女図屏風



面貌部のみ当初のやや黒ずんだ紙が残り、  
周囲は補修時の白い紙である。



第6扇

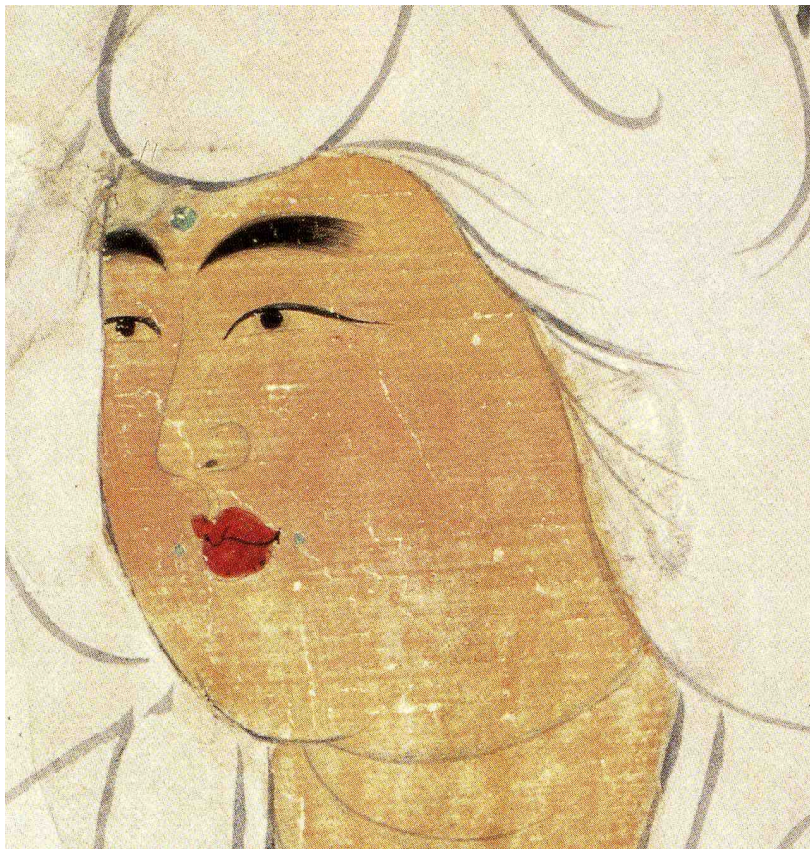
上瞼や眉の張りのある弓なりの形態は第5扇と似る。

頬の柔らかいふくらみの表現は、ぎこちなさが残るようである。

# ①鳥毛立女図屏風



第5扇



第6扇

第5扇と第6扇の顔の比較

形態感は似るが、筆線の柔らかさや伸びやかさなどは第5扇が優れる。

# ①鳥毛立女図屏風

## 〔4〕 第4扇

第5扇とは異なる優れた画家。

- ・ 顔のパーツが中央に寄り、凝視するような表情。
- ・ 白っぽい冷たい肌の質感。
- ・ 首や頬の線は形式化の気味があるが、線自体はたっぷりとした抑揚を持っている。

唐風の明るい大らかさから、日本風の沈んだ繊細な感覚に移行した画家と評価される。





# ①鳥毛立女図屏風



凝視するような視線。  
→右眼と左眼で見ている場所が異なるようだ、という意見もある。

白っぽく冷たい肌の色感

頤の位置が不自然で、頬はやや平板にも感じられる。

首筋の表現に混乱が見られる。

# ①鳥毛立女図屏風



第4扇



第5扇

第5扇は、目鼻口眉等のパーツを顔の全体を広く使ってバランス良く配置しているのに対し、第4扇は、顔の諸パーツが顔の右上側に偏っている。

第5扇では、頤のふくらみが頭部の自然な立体感を表現しているのに対し、第4扇では頤の位置が不自然で頭部の表現を平板化してしまっている。

# ①鳥毛立女図屏風



第4扇

正倉院宝物 北倉Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ (毎日新聞社)  
正倉院事務所 (宮内庁)、1994, 1995, 1996



「吉祥天像」 (薬師寺)

国宝「吉祥天像」図録 (東京国立博物館)、2004

全体に立体感に欠ける第4扇の画家の日本化した表現が、後の「吉祥天像」の表現につながっていくとされる。

# ①鳥毛立女図屏風

## 〔5〕 第2扇

やや技術的に劣る画家

- 目鼻の配置が悪く平板な顔の表現になっている。
- **百鳥毛裙**を着せているところが他とは異なる。



# ①鳥毛立女図屏風



第4扇



第2扇

顔全体で線描が不安定。

第4扇（左図）に比べ、左眉の眉根と鼻梁線がS字状に滑らかに繋がっていない。

肌の色や頬紅の色感などは、第4扇と類似

# ①鳥毛立女図屏風



百鳥毛裙を着る

# ①鳥毛立女図屏風

〔6〕 第1扇

第2扇よりさらに技術が劣る画家

- ・ 第2扇より描線が不確か
- ・ 顔のパーツの配置も統一感に欠ける。



# ①鳥毛立女図屏風



左右の眉は額の面的なつながりを捉えていない。

上瞼の線がたどたどしい

鼻と、人中および唇の関係が不自然

やや白っぽい肌の色感は、第4扇に似る。



# ①鳥毛立女図屏風

第5扇、第3扇、第6扇の画家は、同一工房の師弟関係であった可能性もある。

第4扇、第2扇、第1扇の画家についても、同一工房の師弟関係であった可能性も考えられる。

二つの工房が制作に参加していた可能性が想定できる。

今回の講義はここまでです。

「鳥毛立女図屏風」の各扇の画風の違いをよく確かめておいて下さい。